

日蓮大聖人御書全集

しんこくおうごしよ

神国王御書

新版
671
ゝ
685

しんこくおうごしよ

神国王御書

けんじがんねん

建治元年('75) *

そ おも にほんこく みずほ くに い や

夫れ以んみれば、日本国は、また水穂の国と云い、また野

まと あきつしま ふそうとうんぬん ろくじゅうろつこく にとう いじよう

馬台、また秋津島、また扶桑等云々。六十六国・二島、已上

ろくじゅうはちかこく とうざいさんぜんより なんぼく ふじよう くに ごき

六十八箇国。東西三千余里、南北は不定なり。この国に五畿

しちどう ごき もう やましろ やまと かわち いずみ せつつとう

七道あり。五畿と申すは、山城・大和・河内・和泉・摂津等

しちどう もう とうかいどうじゅうごかこく とうさんどうはちかこく ほくりくどう

なり。七道と申すは、東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸道

しちかこく さんいんどうはちかこく さんようどうはちかこく なんかいどうろつかこく さいかいどう

七箇国・山陰道八箇国・山陽道八箇国・南海道六箇国・西海道

じゅういちかこく ちんぜい い だざいふうんぬん いじよう くに

十一箇国また鎮西と云いまた大宰府云々。已上、これは国な

り。

こくしゅ

国主をたずぬれば、神世十二代は天神七代・地神五代な

かみよじゅうにだい てんじんしちだい ちじんごだい

てんじんしちだい だいいち くにとこたちのみこと ないしだいしち いざなぎのみこと なん

り。天神七代の第一は国常立尊、乃至第七は伊弉諾尊〈男

いざなぎのみこと め ちじんごだい だいいち てんしょうだいじん

なり〉・伊弉冉尊〈妻なり〉。地神五代の第一は天照太神、

いせだいじんぐう ひ かみ おんむすめ

伊勢大神宮・日の神これなり。いざなぎ・いざなぎの御女

ないしだいご ひこなぎさたけろがやふきあえずのみこと かみ だいいし

なり。乃至第五は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊。この神は第四の

彦 火 みこ はは りゅう むすめ いじょう ちじんごだい いじょう

ひこほの御子なり。母は竜の女なり。已上、地神五代。已上

じゅうにだい かみよ

十二代は神世なり。

にんのう だいたいひやくだい だいいち おう じんむてんのう

人王は大体百代なるべきか。その第一の王は神武天皇。

彦 波 瀲

みこ

ないしだいじゅうし

ちゅうあいてんのう

これはひこなぎさの御子なり。乃至第十四は仲哀天皇

はちまん おんちち

だいじゅうご

じんぐうこうごう

はちまん

おんはは

〈八幡の御父なり〉、第十五は神功皇后〈八幡の御母なり〉、

だいじゅうろく

おうじてんのう

ちゅうあい

じんぐう

みこ

いま

はちまんだいぼさつ

第十六は応神天皇、仲哀と神功の御子、今の八幡大菩薩な

ないしだいにじゅうくだい

せんかてんのう

とき

がつし

り。乃至第二十九代は宣化天皇なり。この時までには、月氏・

かんど

ぶつぼう

にほんこく

漢土には仏法ありしかども、日本国にはいまだわたらず。

だいさんじゅうだい

きんめいてんのう

みかど

だいにじゅうしちだい

けいたい

第三十代は欽明天皇。この皇は第二十七代の継体の

ごちやくし

みよさんじゅうにねん

みかど

みよじゅうさんねんみずのえさるじゅうがつ

御嫡子なり。治三十二年。この皇の治十三年壬申十月

じゅうさんにちかのととり

ひやくさいこく

せいめいおう

こんどう

しゃかぶつ

わた

たてまつ

十三日辛酉、百済国の聖明皇、金銅の釈迦仏を渡し奉

いま

にほんこく

じょうげばんにんいちどう

あみだぶつ

もう

る。今、日本国の上下万人一同に阿弥陀仏と申す、これな

ひよう もん い しん き ばんぼう なか ぶつぼう
り。その表の文に云わく「臣聞くならく、万法の中には仏法
もつと よ せけん どう ぶつぼうもつと かみ てんのう まさ

最も善し。世間の道にも仏法最も上なり。天皇陛下また応

しゆぎよう

ゆえ

つつし

ぶつぞう

きようぎよう

ほつし

ささ

に修行すべし。故に、敬んで仏像・経教・法師を捧げ

つか

ふ

こうけん

しん

ぎよう

て使いに附して貢献す。よろしく信じ行ずべきものなり」

いじよう

きんめい

びだつ

ようめい

さんだいさんじゆうよねん

已上。しかりといえども、欽明・敏達・用明の三代三十余年

あが

たも

あいだ

様

々

は崇め給うことなし。その間のことさまざまなりといえど

とき

てんぺんちよう

いま

よ

似

そうら

いま

も、その時の天変地天は今の代にこそにて候えども、今は

よ

似

へんよう

またその代にはにるべくもなき変天なり。

だいさんじゆうさんだいすしゆんてんのう

ぎよう

ぶつぼうわ

ちよう

あが

第三十三代崇峻天皇の御宇より仏法我が朝に崇められ

て、第三十四代推古天皇の御宇に盛んにひろまり給いき。
だいさんじゅうしだいすいこてんのう　ぎよう　さか　広　たま

この時、三論宗と成実宗と申す宗、始めて渡つて候い
とき　さんろんしゅう　じようじつしゅう　もう　しゅう　はじ　わた　そうら

き。この三論宗は、月氏にても、漢土にても、日本にても、
さんろんしゅう　がつし　かんど　にほん

大乘宗の始めなり。故に、宗の母とも、宗の父とも申す。
だいじようしゅう　はじ　ゆえ　しゅう　はは　しゅう　ちち　もう

人王三十六代に皇極天皇の御宇に禪宗わたる。人王
にんのうさんじゅうろくだい　こうぎよくてんのう　ぎよう　ぜんしゅう　渡　にんのう

四十代天武の御宇に法相宗わたる。人王四十四代元正
しじゅうだいてんむ　ぎよう　ほつそうしゅう　にんのうしじゅうしだいげんしょう

天皇の御宇に大日経わたる。人王四十五代に聖武天皇の
てんのう　ぎよう　だいにちきよう　にんのうしじゅうごだい　しょうむてんのう

御宇に華嚴宗を弘通せさせ給う。人王四十六代孝謙天皇の
ぎよう　けこんしゅう　ぐつう　たも　にんのうしじゅうろくだいこうけんでんのう

御宇に律宗と法華宗わたる。しかりといえども、ただ律宗
ぎよう　りつしゅう　ほつけしゅう　りつしゅう

ひろ
てんだいほつけしゅう ぐつう
ばかりを弘めて、天台法華宗は弘通なし。

にんのうだいごじゅうだい さいちよう もう しょうにん ほつけしゅう われ み
人王第五十代に最澄と申す聖人あり。法華宗を我と見

い
出だして、俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・

けごんしゅうとう ろくしゅう 責 落 たも かんど

華嚴宗等の六宗をせめおとし給うのみならず、漢土に

だいにちしゅう もう しゅうあ 知 おな ぎよう かんど

大日宗と申す宗有りとしろしめせり。同じき御宇に漢土

渡 ししゅう 習 渡 たも

にわたりて四宗をならいわたし給う。いわゆる、法華宗・

しんごんしゅう ぜんしゅう だいじよう りっしゅう

真言宗・禪宗・大乘の律宗なり。しかりといえども、

ほつけしゅう りっしゅう ぐつう ぜんしゅう ひろ たま

法華宗と律宗とをば弘通ありて、禪宗をば弘め給わず、

しんごんしゅう しゅう じ 削 ちちだいじとう しょそう かんじよう

真言宗をば宗の字をけずり、ただ七大寺等の諸僧に灌頂

ゆる たも

せけん ひとびと

ゆえ

を許し給う。しかれども、世間の人々はいかなる故という

知

とうじ

ひとびと

い

ひと

かんど

ことをしらず。当時の人々の云わく「この人は、漢土にて

ほつけしゅう

いさい

習

しんごんしゅう

詳

し

法華宗をば委細にならいて、真言宗をばくわしく知ろしめ

推

もう

さざりけるか」とすいし申すなり。

おな

ぎよう

くうかい

もう

ひと

かんど

渡

しんごんしゅう

同じき御宇に、空海と申す人、漢土にわたりて真言宗を

習

みよ

きちよう

ならう。しかりといえども、いまだこの御代には帰朝なし。

にんのうだいごじゅういちだい

へいぜいてんのう

ぎよう

きちよう

ごじゅうにだい

人王第五十一代に平城天皇の御宇に帰朝あり。五十二代

さが

てんのう

ぎよう

こうにんじゅうしねんみずのとうしようがつじゅうくにち

嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に、

しんごんしゅう

じゅうしよ

とうじ

たま

ごこくきようおういん

号

真言宗の住処・東寺を給わつて、護国教王院とごうす。

でんぎようだいしごにゆうめつ いちねん のち

伝教大師御入滅の一年の後なり。

にんのうごじゅうしだいにんみようてんのう

ぎよう

えんにんかしよう

かんど

渡

人王五十四代仁明天皇の御宇に、円仁和尚、漢土にわた

かさ

ほつけ

しんごん

にしゅう

習

渡

にんのう

りて、重ねて法華・真言の二宗をならいわたす。人王

ごじゅうごだいもんとくてんのう

ぎよう

にんじゅ

さいこう

こんごうちようきよう

五十五代文徳天皇の御宇に、仁寿と斉衡とに金剛頂経の

しよ そしつじきよう

しよ

いじようじゅうしかん

つく

だいにちきよう

ぎしやく

疏、蘇悉地経の疏、已上十四卷を造つて、大日経の義釈に

なら

しんごんしゅう

さんぶ

号

ひえいざん

うち

そうじいん

並べて真言宗の三部とごうし、比叡山の内に総持院を

こんりゅう

しんごん

ぐつう

とき

えいざん

しんごんしゅう

建立し、真言を弘通すること、この時なり。叡山に真言宗

ゆる

ざすりようほう

か

ほつけしゅう

を許されしかば、座主両方を兼ねたり。しかれども、法華宗

つき

しんごんしゅう

ひ

言

をば月のごとく、真言宗をば日のごとくといいいしかば、

しよにんとう しんごんしゅう

すぐ 思

諸人等は真言宗はすこし勝れたりとおもいけり。しかれど

ざす りようほう か けんかく たま だいしゅ

も、座主は両方を兼ねて兼学し給いけり。大衆もまたかく

のごとし。

おな ぎよう えんちんかしよう もう ひと ごにつとう かんど

同じき御宇に、円珍和尚と申す人、御入唐。漢土にして

ほつけ しんごん りようしゅう 習 おな みよ てんあんになん きちよう

法華・真言の両宗をならう。同じき御代に天安二年に帰朝。

ひと ほんちよう えいざんだいいち ざす ぎしん だいに

この人は、本朝にしては叡山第一の座主・義真、第二の

ざす えんちよう べつとう こうじよう だいさん ざす えんにんとう ほつけ しんごん

座主・円澄、別当・光定、第三の座主・円仁等に法華・真言

りようしゅう 習 極 たも とうじ しんごん

の両宗をならいきわめ給うのみならず、また東寺の真言

なら たま のち かんど 渡 ほつけ しんごん

をも習い給えり。その後に漢土にわたりて法華・真言の

りようしゅう

磨

たも

いま

みいでら

ほつけしんごん

がんそ

ちしゅう

両宗をみがき給う。

今の三井寺の法華真言の元祖、

智証

だいし

いじよう

しだいし

大師これなり。已上、四大師なり。

そう

にほんこく

しんごんしゅう

はつけ

とうじ

ごけ

総じて、日本国には真言宗にまた八家あり。東寺に五家、

こうぼうだいし

もと

てんだい

さんけ

じかくだいし

もと

弘法大師を本とす。天台に三家、慈覚大師を本とす。

にんのうはちじゅういちだい

あんとかくてんのう

もう

ちち

たかくらいん

ちようし

人王八十一代をば安徳天皇と申す。父は高倉院の長子、

はは

だいじようのにゆうどう

むすめ

けんれいもんいん

おう

げんりやくがんねん

母は太政入道の女・建礼門院なり。この王は元暦元年

きのとみさんがつにじゅうよつか

やしま

かいちゅう

ほう

たま

おう

乙巳三月二十四日、八島にして海中に崩じ給いき。この王

みなもとのよりともしようぐん

責

かいちゅう

鱗

じき

は源頼朝将軍にせめられて、海中のいろくずの食とな

たも

にんのうはちじゅうにだい

おきのほうおう

もう

たかくら

だいさんおうじ

り給う。人王八十二代は隠岐法皇と申す。高倉の第三王子、

ぶんじがんねんひのえうまごそくい はちじゅうさん あわのいん おきのほうおう ちやくし

文治元年丙午御即位。八十三には阿波院、隠岐法皇の長子、

けんんににねん くらい つ たも はちじゅうしだい さどのいん おきのほうおう

建仁二年に位を継ぎ給う。八十四代には佐渡院、隠岐法皇

だいにおうじ じょうきゅうさんねんかのとみにがつにじゅうろくにち おうい 即 たも

の第二王子、承久三年辛巳二月二十六日に王位につき給

おな しちがつ さだお しま 移 たも に さん し

う。同じき七月に佐渡の島へうつされ給う。この二・三・四

さんおう ふし かまくら うだいしよう けにん よしとき 責

の三王は父子なり。鎌倉の右大将の家人・義時にせめられ

たま

させ給えるなり。

にちれんおお うたが い ほとけ もう さんがい

ここに日蓮大いに疑って云わく、仏と申すは三界の

こくしゅ だいぼんのう だいろくてん まおう たいしやく にちがつ してん てんりんじようおう

国主、大梵王・第六天の魔王・帝釈・日月・四天・転輪聖王・

しよおう し しゅ おや さんがい しよおう みな しゃかぶつ

諸王の師なり主なり親なり。三界の諸王は、皆はこの釈迦仏

わ

たま

しよこく

そうりよう

べつりようとう

しゅ

たま

より分かち給いて、諸国の総領・別領等の主となし給え

ゆえ

ぼんしやくとう

ほとけ

もくぞう

り。故に、梵釈等は、この仏を、あるいは木像、あるい

えぞうとう

崇

たも

しゅゆ

あいそむ

ぼんのう

こうだい

崩

は画像等にあがめ給う。須臾も相背かば、梵王の高台もくず

たいしやく

きけん

破

りんおう

冠

お

たも

かみ

れ、帝釈の喜見もやぶれ、輪王もかぼり落ち給うべし。神

もう

くにぐに

こくしゅとう

ほうきよ

たま

しやうじん

と申すは、また国々の国主等の崩去し給えるを、生身のご

崇

たも

こくおう

こくじん

ふぼ

とくあがめ給う。これまた、国王・国人のための父母なり

しゅくん

ししやう

かたとき

背

くにあんのん

主君なり師匠なり。片時もそむかば、国安穩なるべからず。

あが

くに

さんさい

け

しちなん

はら

ひと

やまい

これを崇むれば、国は三災を消し、七難を払い、人は病な

ちやうじゅ

たも

ごしやう

にんてん

さんじやう

ほとけ

たも

く長寿を持ち、後生には人天と三乗と仏となり給うべし。

しかるに、我が日本国は、一閻浮提の内、月氏・漢土に

勝

はちまん

くに

こ

くに

ゆえ

がつし

もすぐれ、八万の国にも超えたる国ぞかし。その故は、月氏

ぶつぼう

さいいきとう

の

そうろう

しちじゅうよかこく

の仏法は西域等に載せられて候。ただ七十余箇国なり。そ

よ

みなげどう

くに

かんど

てら

じゅうまんはっせんしじつしよ

わ

の余は皆外道の国なり。漢土の寺は十万八千四十所なり。我

ちよう

さんじ

じゅうしちまんいつせんさんじゅうしちしよ

くに

がつし

かんど

が朝の山寺は十七万一千三十七所。この国は、月氏・漢土

たい

にほんこく

い

ず

しま

たい

てら

数

に対すれば、日本国に伊豆の島を対せるがごとし。寺をかす

かんど

がつし

うんでい過

だいじよう

うれば、漢土・月氏にも雲泥すぎたり。かれはまた大乘の

くに

しやうじよう

くに

だいじよう

ごんだいじよう

くに

てら

国、小乗の国、大乘も権大乘の国なり。これは寺ごと

はっしゆう

じっしゆう

習

いえいえたたく

だいじよう

どくじゆ

か

に八宗・十宗をならい、家々宅々に大乘を読誦す。彼の

がつし かんどう ぶつぼう もち ひと せんになん いちにん
月氏・漢土等は、仏法を用いる人は千人に一人なり。この
にほんこく げどういちにん

日本国は外道一人もなし。

うえ かみ だいいちてんしやうだいじん だいはちまんだいぼさつ だいさん

その上、神はまた第一天照太神・第二八幡大菩薩・第三

さんのうとうさんぜんよしや ちゆうや わ くに 守 ちやうせき こつか

は山王等三千余社、昼夜に我が国をまぼり、朝夕に国家を

み たも うえ てんしやうだいじん ないしどころ もう みやうきやう

見そなわし給う。その上、天照太神は内侍所と申す明鏡

影 浮 だいいり 崇 たま はちまんだいぼさつ ほうでん

にかげをうかべ、内裏にあがめられ給い、八幡大菩薩は宝殿

捨 しゅじやう いただき すみか たも もう ほとけ かご もう

をすてて主上の頂を栖とし給うと申す。仏の加護と申

かみ しゅご もう か あんとく おき あわ

し、神の守護と申し、いかなれば彼の安德と隠岐と阿波・

さ どう おう そうでん しよじゆうとう 責 ころ

佐渡等の王は相伝の所従等にせめられて、あるいは殺され、

しま はな

あるいは島に放たれ、あるいは鬼きとなり、あるいは大地獄だいいじごくに

お たま

は堕ち給いしぞ。

にほん こく えい ぎん

しちじ

とうじ

おんじよう とう

じゆうしちまん

日本国の叡山・七寺・東寺・園城等の十七万

いっせんさんじゆうしちしよ

やまやま

てらでら

ごぶつじ

おこな

一千三十七所の山々・寺々にいささかの御仏事を行うに

みな てんちようちきゆう

ぎよくたいあんのん

祈

たま

そうら

は、皆、天長地久・玉体安穩とこそいのり給い候え。そ

うえ

はちまんだいぼさつ

こと

てんのう しゆご

だいがん

にんのう

の上、八幡大菩薩は殊に天皇守護の大願あり。人王

だいしじゆうはちだい

たかのてんのう

ぎよくたい

い

たま

い

わ

第四十八代に高野天皇の玉体に入り給いて云わく「我が

こっか

かいびやく

このかた

しん

くん

国家、開闢してより以来、臣をもつて君となすこといまだ

あ

あま

ひつぎかなら

こうしよ

た

とううんぬん

有らざることなり。天の日嗣必ず皇緒を立つ」等云々。ま

だいじん　ぎようきよう　ふ　い　われ　ひやくおうしゆご　ちか　あ
た太神、行教に付して云わく「我に百王守護の誓い有り」
とううんぬん
等云々。

じんむてんのう

このかたひやくおう

されば、神武天皇より已来百王にいたるまでは、いかな

あ

ぎよくたい

恙

おうい

かたむ

ること有りと玉体はつつがあるべからず。王位を傾く

もの

あ

いつしようふしよ

ぼさつ

ちゆうよう

る者も有るべからず。「一生補処の菩薩は中天なし」

しょうにん

おうし

もう

かれがれ

しおう

「聖人は横死せず」と申す。いかにとして、彼々の四王は

おうい

追

落

くに

奪

いのち

うみ

王位をおいおとされ、国をうばわるるのみならず、命を海

捨

み

しまじま

い

たま

てんしやうだいじん

ぎよくたい

にすて、身を島々に入れ給いけるやらん。天照太神は玉体

い

替

たま

はちまんだいぼさつ

ひやくおう

ちか

に入りかわり給わざりけるか。八幡大菩薩の百王の誓いは、

いかになりぬるぞ。

うえ あんとくてんのう

ぎよう

みよううんぎす おんし

その上、安徳天皇の御宇には、明雲座主御師となり、

だいじようのにゆうどう

いちもん

たいじよう

ささ

い

か

太政入道ならびに一門、怠状を捧げて云わく「彼の

こうふくじ

とうし

うじでら

かすが

やしろ

とうし

興福寺をもつて藤氏の氏寺となし、春日の社をもつて藤氏

うじがみ

えんりやくじ

へいし

うじでら

ごう

の氏神となすがごとく、延暦寺をもつて平氏の氏寺と号し、

ひえ やしろ

へいし

うじがみ

ごう

うんぬん

えいざん

日吉の社をもつて平氏の氏神と号す」云々。叡山には、

みよううんぎす

はじ

さんぜんにん

だいしゆ

ごだん

だいほう

おこな

明雲座主を始めとして三千人の大衆、五壇の大法を行い、

だいじん いげ

いえいえ

そんしやうだらに

ふどうみようおう

くよう

しよじしよさん

大臣以下は家々に尊勝陀羅尼・不動明王を供養し、諸寺諸山

ほうへい

だいほう

ひほう

つ

には奉幣し、大法・秘法を尽くさずということなし。

じようきゆう

かつせん

おんとき

てんだいざす

じえん

にんなじ

また承久の合戦の御時は、天台座主・慈円、仁和寺の

おむろ

みいとう

こうそうとう

あいもよお

にほんこく

渡

御室、三井等の高僧等を相催し、日本国にわたれるところ

だいほう

ひほうのこ

おこな

たも

じようきゆうさんねん

の大法・秘法残りなく行われ給う。いわゆる承久三年

かのとみしがつじゆうくにち

じゆうごだん

ほう

おこな

てんだいざす

いちじ

辛巳四月十九日に十五壇の法を行わる。天台座主は一字

きんりんほうとう

ごがつふつか

にんなじ

おむろ

によほうあいぜんみようおうほう

金輪法等、五月二日は仁和寺の御室、如法愛染明王法を

ししんでん

おこな

たも

ろくがつようか

おむろ

しゆぎきようほう

おこな

紫宸殿にて行い給う。また六月八日、御室、守護経法を行

たも

いじよう

しじゆういちにん

こうそう

じゆうごだん

だいほう

ほう

おこな

い給う。已上、四十一人の高僧、十五壇の大法。この法を行

にほん

だいにど

うことは日本に第二度なり。

ごんのだいぶどの

し

たも

ごじようぶく

権大夫殿は、このことを知り給うことなければ、御調伏も

おこな たま

おこな たも

か ほうぼう

か

行い給わず。またいかに行い給うとも、彼の法々・彼の

ひとびと

過

ぶつぼう

おんちから

もう

おうぼう

いりき

人々にはすぐべからず。仏法の御力と申し、王法の威力と

もう

かれ

こくしゅ

さんがい

しゅおうしゅご

たも

にほんこく

申し、彼は国主なり、三界の諸王守護し給う。これは日本国

たみ

しょうき

守

だいだい

しよじゅう

じゅうじゅう

の民なり、わずかに小鬼ぞまぼりけん。代々の所従、重々

けにん

たと

おうい

たみ

責

たか きじ

捕

の家人なり。譬えば、王威をもつて民をせめば、鷹の雉をと

ねこ

く

へび

蛙

吞

ししおう

うさぎ

り、猫のねずみを食い、蛇がかえるをのみ、師子王の兎を

ころ

軽

々

てんじん

殺すにてこそあるべけれ。なにしにか、かるがろしく天神

ちぎ

もう

ぶつぼさつ

驚

たてまつ

しし

地祇には申すべき。仏菩薩をばおどろかし奉るべき。師子

おう

うさぎ

捕

しょうじん

鷹

雉

く

王が兎をとらんに精進をすべきか。たかがきじを食わん

祈 あ

にいのり有るべしや。いかにいのらずとも、大王の身とし

祈 だいおう み

たみ うしな たいすい しょうか 消 おおかぜ しょううん ま

て民を失わんには、大水の小火をけし、大風の小雲を巻く

にてこそあるべけれ。

うえ たいか か き くわ たいが おおあめ ふ

その上、大火に枯れ木を加うるがごとく、大河に大雨を下

おうぼう ちから だいほう おこな あ よりとも よし

らすがごとく、王法の力に大法を行い合わせて、頼朝と義

とき ほんみよう げんしん ほんのう たいしやくとう ぬ と たも

時との本命と元神とをば梵王と帝釈等に抜き取らせ給う。

たと ふるざけ よ もの へび かえる たましい うば

譬えば、古酒に酔える者のごとし。蛇の蝦の魂を奪うが

よりとも よしとき おんたましい おんな おんせい 書 付

ごとし。頼朝と義時との御魂・御名・御姓をばかきつけ

しよそん しよじんと う みあし もと 踏 祈

て、諸尊・諸神等の御足の下にふませまいらせていのりし

堪

見

かば、いかにもこらうべしともみえざりしに、いかにとし

いちねんひとつきの

ふつかいちにち

滅たま

て一年一月も延びずして、わずかに二日一日にはほろび給

ぶつぼうるふくにしゆ

ひとびとよよ

いけるやらん。仏法を流布の国の主とならん人々は、能く能

ごあん

ごしよう

さだ

おん祈

く御案ありて、後生をも定め、御いのりもあるべきか。

にちれん

うたが

ようしよう

ころ

しかるに、日蓮、このことを疑いしゆえに、幼少の比よ

ずいぶん

けんみつにどう

しよしゆう

いつさいきよう

ひと

り随分に顕密二道ならびに諸宗の一切経を、あるいは人

習

われ

かいけん

かんが

み

そうら

ゆえ

そうら

にならい、あるいは我と開見し、勘え見て候えば、故の候

わ

おもて

み

みようきよう

こくど

いけるぞ。我が面を見ることは明鏡によるべし、国土の

せいすい

はか

ぶつきよう

過

盛衰を計ることは仏鏡にはすぐべからず。

仁王經・金光明最勝王經・守護經・涅槃經・法華經

仁王經・金光明最勝王經・守護經・涅槃經・法華經

とう しやだいじようきよう ひら みたてまつ そうろう ぶつぼう くに

等の諸大乘經を開き見奉り候に、仏法に付きて国も

さか ひと じゆ なが ぶつぼう くに 亡 ひと じゆ

盛え人の寿も長く、また仏法に付いて国もほろび人の寿も

みじか 見 そうろう たと みず よ ふね 助

短かるべしとみえて候。譬えば、水は能く舟をたすけ、

みず よ ふね 破 ごこく ひと 養 ひと そんな

水は能く舟をやぶる。五穀は人をやしない、人を損ず。

こなみ こかぜ おおぶね そんな 難 おおなみ おおかぜ こぶね

小波・小風は大船を損ずることかたし。大波・大風には小舟

破 易 おうぼう ま こなみ こかぜ だいこく

やぶれやすし。王法の曲がるは小波・小風のごとし。大国と

だいにん うしな ぶつぼう とが おおかぜ おおなみ こぶね

大人をば失いがたし。仏法の失あるは大風・大波の小舟を

破 くに うたが

やぶるがごとし。国のやぶるること疑いなし。

ほとけしる

のたま

わ めつごまつだい

あくほう あくにん くに

仏記して云わく「我が滅後末代には、悪法・悪人の国を

亡

ぶつぼう うしな

う

たと

さんぜん

ほろぼし仏法を失わんには失すべからず。譬えば、三千

だいせんせかい そうもく たきぎ

しゅみせん 焼

ごうか

大千世界の草木を薪として須弥山をやくに、やけず。劫火

とき

しゅみせん

ね

だいず

ひい

しゅみせん

の時、須弥山の根より大豆ばかりの火出でて須弥山やくが

わ ほう

あくにん げどう てんまはじゅん

ごとく、我が法もまたかくのごとし。悪人・外道・天魔波旬・

ごつうとう

破

ほとけ

ろくつう

らかん

五通等にはやぶられず。仏のごとく六通の羅漢のごとく、

さんね かわ

み まと

いっぱつ

りようげん

当

じかい

三衣を皮のごとく身に紆い、一鉢を両眼にあてたらん持戒

そうとう

おおかぜ

そうもく

靡

こつそうとう

わ

の僧等と、大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等、我が

しょうほう うしな

とき

ぼんしやく

にちがつ

してん

怒

正法を失うべし。その時、梵釈・日月・四天いかりをな

くに だいてんぺん だいちようとう おこ

諫

し、その国に大天変・大地天等を発していさめんに、いさ

くに うち しちなん 起 ふ ぼきようだい おうしん

められずば、その国の内に七難をおこし、父母兄弟・王臣

ばんみん たが だいおんてき きようちよう はは く はけい ちち

万民、互いに大怨敵となり、梟鳥が母を食らい、破鏡が父

害

じこく

けつく たこく

をがいするがごとく、自国をやぶらせて、結句は他国より

くに 責

見 そうつろう

その国をせめさすべし」とみえて候。

いま にちれん いちだいしようぎよう みようきよう

にほんこく う み

今、日蓮、一代聖教の明鏡をもつて日本国を浮かべ見

そうつろう

かがみ う そうつろうひとびと

こくてき ぶつてき

候に、この鏡に浮かんで候人々は、国敵・仏敵たるこ

うたが いちだいしようぎよう なか ほけきよう みようきよう なか

と疑いなし。一代聖教の中に、法華経は明鏡の中の

しんきよう

どうきようとう

ひと かたち 浮

神鏡なり。銅鏡等は、人の形をばうかぶれども、いまだ

こころ

浮

心をばうかべず。法華経は、人の形を浮かぶるのみなら

こころ

浮

こころ

う

せんごう

ず、心をもうかべ、心を浮かぶるのみならず、先業をも

みらい

かんが

たも

曇

未来をも鑑み給うことくもりなし。

ほけきよう

だいしち

まき

みそうら

によらいめつ

のち

法華経の第七の巻を見候えば、「如来滅して後において、

ほとけ

と

きよう

いんねん

しだい

し

仏の説きたもうところの経の因縁および次第を知つて、

ぎ

したが

じつ

と

にちがつ

こうみよう

よ

もろもろ

義に随つて実のごとく説かん。日月の光明の、能く諸の

ゆみよう

のぞ

ひと

せけん

ぎよう

よ

しゅじよう

幽冥を除くがごとく、この人は世間に行じて、能く衆生の

やみ

めつ

とううんぬん

もん

こころ

ほけきよう

いちじ

いづく

闇を滅す」等云々。文の心は、この法華経を一字も一句も

と

ひと

かなら

いちだいしきよう

せんじん

しだい

よ

よ

わきま

説く人は、必ず一代聖教の浅深と次第とを能く能く弁

えたらん人の説くべきことに候。ひと　と 譬えば、そうろう　たと 暦のこよみ

さんびやくろくじゅうにち

勘

いちにち

そうい

ばんじつ

三百六十日をかながうるに、一日も相違せば万日ともに

はんぎやく

みそひともじ

つら

いっくいちじ

そうい

反逆すべし。三十一字を連ねたる一句一字も相違せば

みそひともじとも

うた

三十一字共に歌にてあるべからず。

いつきよう

どくじゆ

はじ

じやくめつどうじよう

お

そう

たとい一経を讀誦すとも、始め寂滅道場より終わり双

りんさいご

しだい

せんじん

めいわく

ひと

わ

林最後にいたるまで、次第と浅深とに迷惑せば、その人は我

み　　ゝぎやく　　つく

むけんじごく

い

きえ

が身も五逆を作らずして無間地獄に入り、これを帰依せん

だんな　あ　び　だいじよう

お

檀那も阿鼻大城に墮つべし。いかにいわんや、智人一人

しゆつげん

いちだいししうぎよう

せんじん

ししうれつ

わきま

とき

がんそ

出現して一代聖教の浅深・勝劣を弁えん時、元祖が

めいわく

そうでん

しよそうとう

こくし

しよけ

迷惑を相伝せる諸僧等、あるいは国師となり、あるいは諸家

し

ひとびと

みづか

あらわ

うえ

ひと

の師となりなんどせる人々、自らのきず顕るる上、人に

軽

歎

かみ

あ

いちにん

ちじん

かるしめられんことをなげきて、上に挙ぐる一人の智人を、

こくしゆ

うった

ばんにん

謗

とき

あるいは国主に訴え、あるいは万人にそしらせん。その時、

しゆご

てんじんとう

くに

破

ばしよう

は

おおかせ

裂

守護の天神等、国をやぶらんことは、芭蕉の葉を大風のさき、

こぶね

おおなみ

み

そうろう

小舟を大波のやぶらんがごとしと見えて候。

むりようぎきよう

はじ

じやくめつどうじよう

お

はんにやきよう

無量義経は、始め寂滅道場より終わり般若経にいたる

いつさいきよう

な

あ

ねんき

かぎ

までの一切経を、あるいは名を挙げ、あるいは年紀を限つ

しんじつ

あらわ

さだ

ねはんぎよう

もう

ほとけ

て、「いまだ真実を顕さず」と定めぬ。涅槃経と申すは、仏

さいご

おんものがたり

はじ

しよじようどう

ごじゆうねん

せつきよう

最後の御物語に、初め初成道より五十年の説教の

おんものがたり

しじゆうよねん

むりようぎきよう

じゃけん

きよう

さだ

御物語、四十余年をば無量義経のごとく邪見の経と定め、

ほけきよう

わ

しゆくん

ごう

たも

なか

ほけきよう

法華経をば我が主君と号し給う。中に法華経ましまして、已

こんとう

ちよくせん

くだ

たま

たほう

じつぼう

しよぶつかはん

今当の勅宣を下し給いしかば、多宝・十方の諸仏加判あり

おのおのほんど

帰

たま

がっし

ふほうぞう

にじゆうしにん

て、各々本土にかえり給いしを、月氏の付法蔵の二十四人は、

しようにじよう

だんだいじよう

ぐつう

ほけきよう

じつぎ

の

たも

ただ小乗・権大乘を弘通して、法華経の実義を宣べ給う

たと

にほんこく

ぎようきぼさつ

がんじんわじよう

ほけきよう

ことなし。譬えば、日本国の行基菩薩と鑑真和尚との法華経

ぎ

し

たま

ぐつう

かんど

なんぼく

の義を知り給いて弘通なかりしがごとし。漢土の南北の

じっし

うち

ぶつぼう

しようにれつ

わきま

そと

せんじん

めいわく

十師は、内にも仏法の勝劣を弁えず、外にも浅深に迷惑せ

さんろんしゅう

きちぞう

けごんしゅう

ちようかん

ほつそうしゅう

じおん

り。また三論宗の吉蔵、華嚴宗の澄観、法相宗の慈恩、

ひとびと

うち

まよ

そと

し

これらの人々は、内にも迷い、外にも知らざりしかども、

どうしんけんご

ひとびと

みようもん

捨

てんだい

ぎ

っ

道心堅固の人々なれば、名聞をすてて天台の義に付きにき。

し

ひとびと

ざんげ

ちから

しょうじ

離

知らず、さればこの人々は懺悔の力によつて生死やはなれ

ほうぼう

つみ

おも

ざんげ

ちから

よわ

けん。はたまた、謗法の罪は重く懺悔の力は弱くして、

あじやせおう

むくろんじとう

じごく

お

阿闍世王・無垢論師等のごとく地獄にや堕ちにけん。

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞうとう

さんさんぞう

いっさい

善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等の三三蔵は、一切の

しんごんし

もう

だいにちによらい

ごだいりくだい

ひとびと

そくしんじようぶつ

真言師の申すは、「大日如来より五代六代の人々、即身成仏

こんぼん

とううんぬん

にちれんかんが

い

ほうぬす

げんし

の根本なり」等云々。日蓮勘えて云わく、法偷みの元師な

ぬすびと　こんぼん

ひとびと　がつし

だいにちきよう

り、盗人の根本なり。これらの人々は、月氏よりは大日経・

こんごうちようきよう　そしつじきようとう

も　きた

きようぎよう

けごん

金剛頂経・蘇悉地経等を齎て来る。この経々は、華嚴・

はんにあ

ねはんぎようとう

およ

うえ

ほけきよう

たい

しちじゆう

般若・涅槃経等に及ばざる上、法華経に対すれば七重の

げれつ

きようもん

み

かつかく

めいめい

下劣なり。经文に見えて赫々たり、明々たり。

かんど

きた

てんだいだいし

しかんとう

さんじつかん

み

しかるを、漢土に來つて、天台大師の止觀等の三十卷を見

した

振

こころ

惑

およ

わ

きよう

て、舌をふるい心をまどわして、「これに及ばずば、我が経

ぐつう

すぐ

言

もうごがんぜん

弘通しがたし。勝れたりといわんとすれば、妄語眼前なり。

あん

ひと

ふか

だいもうご

あん

い

いかんがせん」と案ぜしほどに、一つの深き大妄語を案じ出

たも

だいにちきようさんじゆういっぽん

ほけきようにじゆうはつぽん

だし給う。いわゆる大日経三十一品を法華経二十八品な

むりようぎきよう

はら合

あ

さんみつ

なか

いみつ

らびに無量義經に腹あわせに合わせて、三密の中の意密を

ほけきよう

どう

うえ

いん

しんごん

くわ

ほけきよう

ば法華經に同じ、その上に印と真言とを加えて、法華經は

りやく

だいにちきよう

こう

い

い

こん

い

とう

略なり大日經は広なり、已にも入れず今にも入れず当に

外

ほけきよう

方

人

さんせつ

なん

のが

けつく

もはずれぬ。法華經をかとうどとして三説の難を脱れ、結句

いん

しんごん

ほけきよう

う

お

しんごんしゆう

た

は印と真言とをもつて法華經を打ち落として真言宗を立

そうろう

たと

さんによ

きさき

な

さんおう

ほろ

てて候。譬えば、三女が后と成つて三王を喪ぼせしがご

ほけきよう

るつう

ねはんぎよう

だいく

われめつ

のち

あくびく

とし。法華經の流通の涅槃經の第九に「我滅して後、悪比丘

とうわ

しようほう

めつ

たと

によにん

しる

たま

等我が正法を滅すべし。譬えば女人のごとし」と記し給い

けるは、これなり。

されば、善無畏三蔵は閻魔王にせめられて、鉄の縄七脈ぜんむいさんぞう えんまおう 責

付

つけられて、からくして蘇りたれども、また死する時はしとき

こくひいんいん

ほね

あらわ

もう

むけんじごく

「黒皮隠々として骨それ露なり」と申して、無間地獄の

ぜんそう

しこつ

あらわ

たま

ひとし

のち

いろ

くろ

前相、その死骨に顕し給いぬ。「人死して後、色の黒きは

じごく

お

いちだいしようぎよう

さだ

こんごう

地獄に墮つ」とは、一代聖教に定むるところなり。金剛

ち

ふくうとう

し

ひとびと

智・不空等も、またこれをもつて知んぬべし。この人々は

かいげ

あ

み

そうら

ごうじよう

さんげ

改悔は有りと見えて候えども、強盛の懺悔のなかりける

いま しんごんし

し

げんそうこうてい

か。今の真言師は、またあえて知ることなし。玄宗皇帝の

みよ

ほろ

ふしん 晴

そうろう

御代の喪びしことも、不審はれて候。

にほんこく

こうぼう

じかく

ちしよう

ほうぼう

なら

つた

日本国は、また弘法・慈覚・智証、この謗法を習い伝え

じしん し

ひと

思

て、自身も知ろしめさず。人はまたおもいもよらず。しば

ほつけしゆう

ひとびとそうろんあ

つい

てんだいしゆう

らくは法華宗の人々相論有りしかども、終には天台宗よう

おとろ

ごじゆうごだい

ざす

みよううん

にんのうはちじゆういちだい

あんとか

やく衰えて、五十五代の座主・明雲、人王八十一代の安德

てんのう

このかた

えいざんいつこう

しんごんしゆう

だいろうくじゆういちだい

天皇より已来は、叡山一向に真言宗となりぬ。第六十一代

ざす

けんしんごんのそうじよう

てんだいざす

な

え

しんごんしゆう

の座主・顕真権僧正は、天台座主の名を得て、真言宗に

うつ

のち

ほつけ

しんごん

捨

いつこうほうぼう

遷るのみならず、しかる後、法華・真言をすてて、一向謗法

ほうねん

でし

じようきゆうじようぶく

じようしゆ

じえんそうじよう

の法然が弟子となりぬ。承久調伏の上衆・慈円僧正は、

だいろうくじゆうにだい

ご

く

しちじゆういちだい

しだい

ざす

第六十二代ならびに五・九、七十一代の四代の座主、

おきのほうおう おんし

隠岐法皇の御師なり。

ひとびと

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞう

じ

これらの人々は、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・慈

かく ちしようとう

しんごん

うつわ

替

ひと

ちすい

覚・智証等の真言をば、器はかわれども一つ智水なり。そ

うえ

てんだいしゅう

ざす

な

ぬす

ほけきよう

ごりよう

ちぎよう

の上、天台宗の座主の名を盗んで法華經の御領を知行して

さんぜん

かしら

いっこく

ほつし

あお

だいにちきよう

もと

三千の頭となり、一国の法師と仰がれて、大日經を本と

しちじゅう 下

しんごん

はちじゅうまさ

思

して七重くだれる真言をもつて八重勝れりとおもえるは、

てん

ち

思

たみ

おう

誤

いし

たま

誤

天を地とおもい、民を王とあやまち、石を珠とあやまつの

たま

いし

言

ひと

きようしゆしやくそん

たほうぶつ

じつぼう

みならず、珠を石という人なり。教主釈尊・多宝仏・十方

しよぶつ

ごおんてき

いっさいしゆじよう

がんもく

うば

と

の諸仏の御怨敵たるのみならず、一切衆生の眼目を奪い取

さんぜんどう もん と さんあくどう どう ひら ぼんしゃく にちがつ

り、三善道の門を閉じ、三悪道の道を開く。梵釈・日月・

してんとう してんぜんじん ひと ばつ

四天等の諸天善神、いかでかこの人を罰せざらん。いかで

ひと あお だんな しゅご たも てんしょうだいじん ないしどころ

かこの人を仰ぐ檀那を守護し給うべき。天照太神の内侍所

はちまんだいぼさつ ひやくおうしゅご おん 誓 かな

も、八幡大菩薩の百王守護の御ちかいも、いかでか叶わせ

たも

給うべき。

よ よし このかた いちぶん じひ もよお

余、この由をかつ知りしより已来、一分の慈悲に催され

ずいぶん でし 粗々 もう しだい ぞうちよう

て、ほぼ随分の弟子にあらあら申せしほどに、次第に増長

こくしゅ き こくしゅ り おや ひ かたき

して国主まで聞こえぬ。国主は理を親とし非を敵とすべき

ひと しよにん ざんげん

人にておわすべきが、いかながしたりけん、諸人の讒言を

納

ひとり

よ

たも

か

てんだいだいし

なんぼく

おさめて、一人の余をすて給う。彼の天台大師は、南北の

しよにん

怨

ちん

ずいにだい

みかどおも

たま

諸人あだみしかども、陳・隋二代の帝重んじ給いしかば、

しよにん

あだ

薄

でんぎようだいし

なんとしちだいじざんげん

諸人の怨もうすかりき。この伝教大師は、南都七大寺讒言

かんむ

へいぜい

さが

さんおうもち

たま

おんてき

せしかども、桓武・平城・嵯峨の三皇用い給いしかば、怨敵

犯

もおかしがたし。

いま

にほんこくじゅうしちまんいつせんさんじゅうしちしよ

しよそうとう

怨

今、日蓮は、日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあだ

こくしゅもち

たま

ばんみん

怨

するのみならず、国主用い給わざれば、万民あだをなすこ

ふぼ

かたき

こ

しゅくせ

怨

勝

けつく

と、父母の敵にも超え、宿世のわだにもすぐれたり。結句

にど

おんる

いちど

こうべ

およ

か

だいしようこんぶつ

まっぼう

は、二度の遠流、一度の頭に及ぶ。彼の大莊嚴仏の末法の

しびく

ろつぴやくはちじゅうまんおくなゆた

しよにん ふじびく

四比丘ならびに六百八十万億那由他の諸人が普事比丘

いちにん

こ

ししおんのうぶつ

まつ

しやういびく

むりやう

一人をあだみしにも超え、師子音王仏の末の勝意比丘・無量

でしとう

きこんびく

責

まさ

かくとくびく

の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり。覚徳比丘がせめ

ふきようぼさつ

じやうもく

被

かぎ

られし、不輕菩薩が杖木をこうぼりしも、限りあれば、こ

過

覚

そうろう

れにはよもすぎじとぞおぼえ候。

ひやくせん

ひと

にちれんほけきやう

ぎやうじや

そうら

もし百千にも一つ、日蓮法華經の行者にて候わば、

にほんこく

しよにん

ごしやう

むけんじこく

置

げんしん

くに

日本国の諸人、後生の無間地獄はしばらくおく、現身には国

うしな

たこく

と

か

きそう

きんそう

を失い他国に取られんこと、彼の徽宗・欽宗のごとく、

うだえんおう

きりたおうとう

ほか

優陀延王・訖利多王等のごとくならん。またその外は、あ

み　びやくらい　こくらい

しよあくじゆうびよううたが

るいはその身は白癩・黒癩、あるいは諸悪重病疑いな

ぎ

にちれんほけきよう

ぎようじゃ

かるべきか。もしその義なくば、また日蓮法華經の行者に

み

げんしん

びやくらい

こくらいとう

しよあくじゆうびよう

う

あらじ。この身、現身には白癩・黒癩等の諸悪重病を受

と

ごしよう

だいば

くぎやりとう

むけんだいじよう

お

け取り、後生には提婆・瞿伽利等がごとく無間大城に墮つ

べし。

にちがつ

いたてまつ

しゆら

やかえ

わ

まなこ

た

日月を射奉る修羅は、その矢還つて我が眼に立ち、

ししおう

ほ

くけん

わ

はら

破

しやくし

ころ

師子王を吼うる狗犬は、我が腹をやぶる。釈子を殺せし

はるりおう

すいちゆう

なか

たいか

い

ほとけ

おんみ

ち

い

波琉璃王は、水中の中の大火に入り、仏の御身より血を出

だいばだった

げんしん

あび

ほのお

かん

こんどう

しやくそん

だせし提婆達多は、現身に阿鼻の炎を感じ。金銅の釈尊

焼

もりや

してんのう

や 当

とうだいじ

こうふくじ

や

をやきし守屋は、四天王の矢にあたり、東大寺・興福寺を焼

きよもりにゆうどう

げんしん

み 燃

やまい

受

かれ

きし清盛入道は、現身にその身もうる病をうけにき。彼ら

みなだいじ

にちれん

あ

しょうじ

しょうじ

は皆大事なれども、日蓮がことに合わすれば小事なり。小事

証

だいじ

げんばち

すら、なおしるしあり。大事、いかでか現罰なからん。

よろこ

きようもん

まか

ご

ごひやくさいこうせんるふ

待

悦ばしいかな、経文に任せて五の五百歳広宣流布をま

かな

とうじようけんご

とき

あ

くにしゆらどう

つ。悲しいかな、鬪諍堅固の時に当たつて、この国修羅道

きよもりにゆうどう

よりとも

げんぺい

りようけ

もと

くけん

となるべし。清盛入道と頼朝とは源平の両家、本より狗犬

えんこう

しょうにん

しょうふく

よりとも

怨

と猿猴とのごとし。小人・小福の頼朝をあだみしゆえに、

しゆくてき

にゆうどう

いちもん

滅

うえ

とが

しゆじよう

さいかい

しず

宿敵たる入道の一門ほろびし上、科なき主上の西海に沈

たま

ふびん

きようしゆしやくそん

み給いしことは不便のことなり。これは、教主釈尊・

たほう

じつぼう

ほとけ

おんつか

せけん

いちぶん

とが

もの

多宝・十方の仏の御使いとして、世間には一分の失なき者

いつこく

しよにん

怨

りようど

るざい

あ

を、一国の諸人にあだますのみならず、両度の流罪に当て

につちゆう

かまくら

こうじ

渡

ちようてき

ほか

て、日中に鎌倉の小路をわたすこと朝敵のごとし。その外、

しようあん

しやくそん

ほんぞん

いつさいきよう

あんち

しつ

小菴には釈尊を本尊とし、一切経を安置したりしその室

は

毀

ぶつどう

きようかん

しよにん

踏

を刎ねこぼちて、仏像・経巻を諸人にふまするのみならず、

ふんदै

踏

い

にちれん

かいちゆう

ほけきよう

い

糞泥にふみ入れ、日蓮が懷中に法華経を入れまいらせて

そうら

取

出

いづべ

散

々

う

苛

候いしをとりいだして、頭をさんざんに打ちさいなむ。

しゆくい

とうぎ

とが

ほけきよう

このこと、いかな。宿意もなし、当座の科もなし、ただ法華経

ぐつう

たいか

を弘通するばかりの大科なり。

にちれん てん

む

こえ

もう

ほけきよう

じよほん

はいけん

日蓮、天に向かい、声あげて申さく、法華經の序品を拝見

たてまつ

ぼんしやく

にちがつ

してん

りゆうおう

あしゆら

にかい

し奉れば、梵釈と日月と四天と、竜王と阿修羅と、二界

はちばん

しゆ

むりよう

こくし

しよじん

しゆうえ

たま

とき

いこん

八番の衆と無量の国土の諸神と集会し給いたりし時、已今

とう

だいいち

せつ

き

とき

われ

せつせんどうじ

み

当に第一の説を聞きし時、我とも雪山童子のごとく身を

くよう

やくおうぼさつ

ひじ

焼

思

供養し、薬王菩薩のごとく臂をもやかんとおもいしに、

きようしゆしやくそん

たほう

じつぼう

しよぶつ

みまえ

いま

ぶつぜん

教主釈尊、多宝・十方の諸仏の御前にして、「今、仏前に

みずか

せいごん

と

かんぎよう

たま

さいわ

において、自ら誓言を説け」と諫曉し給いしかば、幸いに

じゆんぷう

え

せそん

みことのり

まさ

ぶぎよう

順風を得て、「世尊の勅のごとく、当につぶさに奉行す

べし」と、二処三会の衆、一同に大音声にしょさんえ しゅ いちどう だいおんじよう はなを放つて誓い給あ ぶつぜんい

しは、いかんが有るべき。ただ仏前にては、かくのごとく申もう

して、多宝・十方の諸仏は本土にかえり給う、釈尊は御入滅たほう じつぽう しょぶつ ほんど 帰 たも しゃくそん ごにゆうめつ

ならせ給いてほど久しくなりぬれば、末代辺国に法華經のたま ひさ まっだいへんごく ほけきよう

行者有りととも、梵釈・日月等、御誓いをうちわすれて守護ぎようじやあ ぼんしゃく にちがつとう おんちか 打 忘 しゅご

し給うことなくば、日蓮がためには一旦のなげきなり。無始たも にちれん いったん 歎 むし

より已来、鷹の前のきじ、蛇の前のかえる、猫の前のねずみ、このかた たか まえ 雉 へび まえ 蛙 ねこ まえ 鼠

犬の前のさるとありし時もありき。ゆめの代なれば、仏いぬ まえ 猿 とき 夢 よ ぶつ

菩薩・諸天にすかされまいらせたりける者にてこそ候わめ。ぼさつ しょてん 賺 もの そうら

歎

なによりもなげかしきことは、梵と帝と日月と四天等の、

なんみようほうれんげきよう

ほけきよう

ぎようじゃ

だいなん

あ

捨

南無妙法蓮華經の法華經の行者の大難に値うをすてさせ

たま

げんしん

てん

かほう

つ

はな

おおかせ

ち

給いて、現身に天の果報も尽きて、花の大風に散るがごと

あめ

そら

ふ

ひと

みようじゆう

あびごく

く、雨の空より下るごとく、「その人は命終して、阿鼻獄

い

むけんだいじよう

お

たま

哀

に入らん」と、無間大城に堕ち給わんことこそあわれには

覚

そうら

か

ひとびと

さんぜじつぼう

しよぶつ

方

人

おぼえ候え。たとい、彼の人々、三世十方の諸仏をかとうど

し

由 述

もう

たも

にちれん

ひとびと

として知らぬよしのべ申し給うとも、日蓮はその人々には

つよ

敵

ほとけ

偏

頗

ぼんしやく

強きかたきなり。もし仏のへんばおわせずば、梵釈・

にちがつ

してん

むけんだいじよう

かなら

付

日月・四天をば、無間大城には必ずつけたてまつるべし。

にちれん まなこ 恐

急

ぶつぜん

ちか

果

日蓮が眼おそろしくば、いそぎいそぎ仏前の誓いはたし

たま にちれん くち

給え。日蓮が口。

がもくりようがん

和 布

搗 布

海 松ひとたわら

た そちら

お

鵝目両貫、わかめ・かじめ・みる一俵、給び候い

ほ 飯

焼

米

おのおの

紙

袋

た そちら

わんぬ。干しい・やきごめ・各々一こうぶくろ、給び候い

お

麦

一

櫃

いちいち

おんころぎし

書

尽

了わんぬ。またむぎひとひとつ。一々の御志はかきつくす

もう

ほうもんこた

そうら

とど

そうら

お

べしと申せども、法門巨多に候えば、留め候い了わんぬ。

たもん

聞

たも

だいじ こと

書

そうろう

他門にきかせ給うなよ。大事の事どもかきて候なり。